

社会的比較による文化的自己観の内面化

—— 横断資料に基づく発達の検討 ——

高 田 利 武¹

日本文化における相互協調的自己観が個人に内面化される過程を発達的に検討するべく、6つの年齢段階に区分される児童期後期から中年成人期にかけての調査対象者から、(1)日常生活での社会的比較の頻度と様態、(2)相互独立／協調性、(3)批判的自己認識の程度、(4)自己認識の手段についての認知、の4種の指標が測定された。各指標の発達の変化について従来の知見が追認された他、(1)青年中期以降、他者志向的な社会的比較を通じて、相互協調性や批判的自己認識、及び自己認識の源泉の認知における日本的自己の特質が形成される、(2)成人期以降は日本的自己の特質とは一見矛盾した現象が示されるが、自己認識形成の過程は青年期と同一である、(3)青年前期までは、社会的比較は相互独立性をもたらし、相互協調性が肯定的自己認識を生む等、自己認識形成の過程は青年中期以降と異なる、という知見がパス解析を通じて得られた。

キーワード：相互独立／協調性、社会的比較、自己認識手段の認知、発達の变化、日本文化

目 的

本研究の目的は、日本文化に特有な自己認識が発達的に形成される過程を、発達段階では青年期、形成手段としては社会的比較に焦点をあて、児童期後期から中年成人期に亘る横断資料によって検討し、1つのモデルを提唱することにある。

日本人の自己の特質については多くの指摘がある。例えば、甘え(土居, 1969)、日本の自我(南, 1983)、間人主義(浜口, 1982)の概念に共通する自己認識の特性は、他者との親和、他者評価への懸念、個人の自立の低さ等、他者からの被規定性であることを高田・松本(1995)は示している。また、欧米人に比べ自己批判的傾向を示すことも、自己認識の顕著な特性として従来しばしば指摘されている(例えば、Diener & Diener, 1995; Heine, Takata, & Lehman, 2000)。

北山(1998)は文化心理学の観点からこれを包括的に捉え、文化的自己観の概念を提唱している。これはある文化で歴史的に共有された「自己」の前提であり、相互独立的自己観と相互協調的自己観とがある。自己を他者から分離した独自な実体と捉える前者は、西欧、特に北米中産階級に典型的である。互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える後者は、日本を含むアジアで一般的である(Markus & Kitayama, 1991)。日本人の自己の特性の多くは、相互協調的自己観の反映として理解される(北山, 1998; 高田・松本, 1995)。

文化的自己観は文化と心理の相互交渉過程の産物であり(北山, 1998)、相互協調的自己観に基づく自己認識も日本文化の中で発達的に形成される。育児(東, 1994)や学校教育(塘, 1995; 恒吉, 1992)を通じ、乳幼児期・児童期の段階から日本的自己が基礎づけられると指摘されているが、ここでは青年期の意義に着目したい。日本的自己の特質は成人期より青年期で著しい(高田・松本, 1995)、自己批判傾向は児童期や成人期より青年期で目立つ(高田, 2001)、相互独立性は青年期に低下し成人期以降は上昇する、相互協調性は青年期に極大となり成人期に低下する(高田, 1999b)²、等の知見が集積されている故である。

青年期は子どもから大人へ自己が再構成され、他者と峻別される個を主体的に自覚する時期である(Ausbel, Montemayor, & Svojiar, 1977)。ところが日本の青年には、個の自立を適当に切り上げ他者との調和を目指す「日本的バイパス」の現象があることを梶田(1988)は論じている。日本的自己の特質がむしろ青年期に顕著なことを示す知見はこれと対応する。また、青年期の自我同一性形成でも、他者との親和や同調が日本文化では重要な意味を持つ(三好, 2001; 谷, 1997)。日本文化で優勢な相互協調的自己観は、青年期に主体的に内面化される可能性が示唆される。

他方、文化的自己観を体現した自己認識はどのように形成されるのだろうか。自己認識形成の機制には自

² 社会的表象である文化的自己観と区分し、尺度で測定された個人差を相互独立性・相互協調性と呼ぶ。

¹ 奈良大学社会学部 takatat@daibutsu.nara-u.ac.jp

己観察 (Bem, 1972), 他者からの直接・間接のフィードバック (Cooley, 1902) 等が指摘されているが, ここでは他者と自分を比較する社会的比較に着目する。多様な機能を持つ社会的比較は自己認識の手段として理解され (Hogg, 2000; 高田, 1992), 相互協調性の高い大学生は自己評価の基準に社会的比較を多用する (高田, 1993), 日常生活での社会的比較, 特に自分と類似した他者との比較が多い (高田, 1999a), 社会的比較の頻度自体が青年期に増大する (高田, 1999a) 等, 相互協調性と社会的比較との関連を示す諸知見があるからである。

これらは, 日本文化に特徴的な相互協調的自己観が青年期に内面化される際の, 社会的比較の重要性を示唆する。相互協調的自己観が優勢な日本文化では他者による自己規定が顕著であるが, それは自己認識の内容のみならず, その形成の過程にも及ぶことが考えられる。周囲の他者との社会的比較は, 青年が相互協調的自己観を内面化しつつ, 自己を主体的に認識し再構成する積極的営みとして捉えることが可能であろう。

一方, Schoeneman (1981) は自己認識の手段として自己観察, 社会的フィードバック, 社会的比較を取り上げ, 自分に該当する形容詞の選択の理由をこの中から選ばせる手法を用い, 米国人大学生では自己観察の比率が圧倒的に高いことを示している。これに準拠した方式を用い, 高田 (2001) は自己認識手段の発達の変化を検討しているが, 日本人青年が自己観察を挙げる率は米国人より低い一方, その前後の児童期や成人期より高いことが示されている。また, 社会的手段 (社会的フィードバックと社会的比較) の選択率は高校・大学生で最低となった。青年期に社会的比較の頻度が高まるといふ高田 (1999a) の知見とは全く逆である。また, 相互独立/協調性と社会的比較の選択率との関連も見られず, この点も社会的比較と相互協調性との関連を示す高田 (1999a, 1993) の知見と矛盾する。

このように矛盾した知見を導いた Schoeneman (1981) の手法は, その測定結果の意味を再検討する必要がある。通常, 行動や内的状態の自己評定を求める場合, 回答はあくまでも評定者自身が想起した内容であり必ずしも現実を反映しない可能性は常にあるが, この手法ではそれが特に著しくなり得る。何故なら, 他者との比較行動の直接の想起や, 形容詞選択を通じた自己の内的特性の認識に比べ, 自己の特性をどのようにして認識したかを想起する, 抽象度の高いメタ自己認識を扱っているからである。

一般に自己認識を構成する内容は多様で, 必ずしも「事実」では無い事柄も含まれると共に, それらが常に

意識されている訳ではない。自己記述に反映されるのは, その時点で想起・意識された自己認識—現象的自己である (Baumeister, 1998)。普段は意識されることの少ないメタ自己認識が必要な Schoeneman (1981) の手法は, 自己認識形成過程の実態よりも, 現象的自己認識の一側面, 即ち認識された自己の姿から派生した自己像に対する意味づけを示すと理解すべきであろう。

高田 (2001) の知見では, 自分の否定的特性には自己観察, 肯定的特性には社会的手段が選択される傾向が顕著であった。これは, 他者の期待に沿い得ぬ自己の否定的側面は「反省」され (唐沢, 1997), 自己への肯定的認識は他者規範的に想起される点で, 日本的自己の特質を反映していると言える。そして, 既に述べたように批判的自己認識が青年期に顕著なことが, 自己認識手段想起での自己観察の増大と社会的手段の減少を導くと解釈されるのである³。

こう考えると, 先行研究で発達的变化が検討された, (1)文化的自己観の個人への反映としての相互独立/協調性, (2)自己への批判的認識, という日本的自己に係わる特質, 及び, (3)日常生活での社会的比較行動, (4)自己認識手段の想起とその否定的側面と肯定的側面での差異, という自己認識を巡る現象について, 以下の連鎖モデルを想定できるであろう。即ち, (1)自分と類似した他者との社会的比較を通じて, 文化的自己観が自己認識に反映され相互独立/協調性が形成される, (2)内面化された文化的自己観に規定されて, 自己認識の基本傾性, 即ち自己への肯定的あるいは批判的認識が形成される, (3)その基本傾性に基づいて自己認識手段がメタ自己認識され, 否定的側面には自己観察, 肯定的側面には社会的手段が想起される。この過程は発達的にどの段階で明確になるのだろうか。

従来の諸研究では, 相互独立/協調性の発達的变化 (高田, 1999b) を中心に, 社会的比較との関連 (高田, 1999a), 自己認識及びメタ自己認識としての自己認識手段との関連 (高田, 2001) が別個に扱われ, これらが総合的に検討されていない。上に仮定した, 日本文化の特質を反映した自己認識の形成過程を検討するには, 全ての指標の相互関係を吟味する必要がある。そこで本研究では同一対象者から全指標を測定し, 日本文化における自己認識形成の過程を発達的に検討する。

具体的には, 先ず日本的自己の特質とそれを巡る現象に関して, 青年期に顕著であると予測される以下の

³ 日本人の選択率が米国人より自己観察で低く社会的手段で高いことは, この指標が実態を幾分かは反映していることを窺わせる。

傾向を再確認する。

1. 相互独立性は低下し、相互協調性は上昇する。
2. 批判的に自己を認識する傾向が高まる。
3. 日常生活での社会的比較の頻度、とりわけ自分と類似した他者を志向した比較の頻度が高まる。
4. 自己認識手段の想起について、社会的手段が減少し自己観察が増大する。
5. 自己の否定的側面では自己観察、肯定的側面では社会的手段が自己認識の手段として想起されやすい。

次に、社会的比較、相互独立／協調性、批判的自己認識、自己認識手段想起、に関する上記モデルの妥当性を年齢段階毎に検討する。

方 法

調査対象者

(1)小学6年生126名(男女各62,64名;平均11.7歳), (2)中学2年生110名(男女各57,53名;平均13.6歳), (3)高校2年生111名(男女各48,63名;平均16.1歳), (4)大学2年生147名(男女各87,60名;平均19.8歳), (5)若年成人157名(2・30歳台の男女各62,95名;平均34.2歳), (6)中年成人189名(4・50歳台の男女各98,91名;平均46.4歳), の6年齢群。(1)~(3)は公立校生徒, (4)は私立大学生, (5)(6)は私立大学生の父母(郵送調査,回答率62.1%)と私立幼稚園児の父母(担任教師を通じて配布)で, 1999年1月~2000年5月に実施した。

質問紙

全群の対象者に以下の3種を実施した。

相互独立／協調性尺度 高校生以上には高田・大本・清家(1996)の尺度, 小・中学生には児童・生徒版(高田, 1999b)を用いた。相互独立性と相互協調性各10項目から成る7段階(児童・生徒用は5段階)尺度であり, 欧米で一般的なSingelis(1994)の尺度と同程度の信頼性と妥当性が確認されている(高田, 2000a)⁴。

自己認識手段測定質問紙 Schoeneman(1981)に準

⁴ Singelis(1994)の尺度と同様, 本尺度には逆転項目がない。これは, (1)肯定的特性への否定的評価と否定的特性への肯定的評価とは必ずしも等しくない(遠藤, 1992), (2)相互独立性の否定と相互協調性, 相互協調性の否定と相互独立性は紛らわしい, による。逆転項目の欠如が偏りを生む可能性を完全には否定できぬが, 例えば黙従傾向から予測される相互独立性と協調性の正相関は各年齢群で見られないことも含め, 本尺度を用いた諸研究が理論的に導出される結果をもたらしていることを総合的に考慮すれば(高田, 2000a), 尺度得点が著しく偏る明確な根拠は認められない。これについてはSingelis(1994)も参照。また, 両尺度の関係についてはKashima & Hardie(2000)を参照。

拠し高田(2001)と同一である。まずTABLE 2に示した肯定／否定的形容詞各15個, 計30個の中から, 自分に該当する5個を選択する。これらは, 加藤(1977)による195個の形容詞から高田(1995)の結果に基づき選定した。選択は4個以下でも可としたが, その対象者は分析から除外した⁵。次に, 5個の形容詞の各々について, その選択の理由を, (1)自己観察(自分自身の行為・思想・感情や, それらが起こった状況を自ら振り返って[小・中学生用では, 日ごろの自分の行いや考え, 気持ちを自分自身で反省して]), (2)社会的フィードバック(他の人が私に対して直接・間接に言うことや, 私に示す反応を通じて[両親, 先生, 友だちなどが自分自身に対して言うことや, することを考えて]), (3)社会的比較(自分の行為や意見を他の人と比較して[自分の考えや, やっていることを他の子どもと比べて])の中から1つ選択する。選択肢の記載順の異なる6種の質問紙をランダムに配布し順序効果を統制した。

社会的比較質問票 日常生活での社会的比較の頻度と様態を問い, 比較頻度は「日頃, どのくらい自分と他の人を比較しているか」という質問に対する4段階評定(ほとんどいつも比較している, ときどきは比較する, まれに比較することもある, 比較することはない), 様態は, 何を比較するか(対象), 誰と比較するか(相手), なぜ比較するか(理由)について, TABLE 3に示す選択肢から選択を求めた(複数選択)。小・中学生用では一部記述を平易にした。これらは高田(1999a)と同一であるが, そこで複数の自由記述回答があった「自己向上」を比較理由の選択項目に加えた。

結 果

相互独立性と相互協調性

各10項目の評定値の平均を尺度値とした⁶。相互独立／協調性の年齢毎の平均をTABLE 1に示す。年齢×性別×相互独立／協調性(対象者内要因)の分散分析の結果⁷, 年齢×相互独立／協調性の交互作用が有意で($F(5,828)=7.50$ $p<.001$), 小学生から若年成人までは相互

⁵ これも含め回答不完全で分析から除外した者が合計111名あり, これを除外した数を調査対象者とした。除外者が占める割合の年齢による相違は認められない。また, 分析可能な回答不完全者を含めた場合も, 結果の概要に変化は見られない。

⁶ 7段階評定(びったりあてはまる, あてはまる, ややあてはまる, どちらともいえない, あまりあてはまらない, あてはまらない, 全くあてはまらない)を7~1と得点化した。児童・生徒用尺度の5段階評定値は7段階評定値に変換し, あてはまるを7, ややあてはまるを5.5, どちらともいえないを4, ややあてはまらないを2.5, あてはまらないを1とした(高田, 1999b参照)。なお, 各群の α 係数は, 相互独立性は.77~.86, 相互協調性は.72~.79であった。

TABLE 1 各指標の年齢段階毎の平均値

	小学生	中学生	高校生	大学生	若年成人	中年成人
文化的自己観						
相互独立性 ¹	4.49 _{cb} (0.81)	4.36 _{ab} (0.67)	4.25 _a (0.82)	4.38 _{ab} (0.90)	4.39 _{ab} (0.90)	4.63 _c (0.78)
相互協調性 ¹	4.68 _a (0.70)	4.48 _b (0.73)	4.80 _{ac} (0.87)	4.96 _c (0.72)	4.70 _a (0.69)	4.55 _b (0.70)
社会的比較						
比較頻度 ²	2.67 _{ab} (0.80)	2.51 _{ad} (0.81)	2.83 _{bc} (0.73)	3.11 _c (0.71)	2.62 _{ab} (0.80)	2.44 _d (0.75)
自己志向比較 ³	0.28 _a (1.02)	-0.05 _{ad} (1.04)	-0.48 _c (0.96)	0.12 _{ad} (1.04)	-0.07 _b (0.94)	0.09 _{ad} (0.91)
他者志向比較 ³	0.07 _a (0.82)	0.25 _{ad} (0.91)	0.32 _{bd} (0.92)	0.47 _{bd} (1.07)	-0.28 _c (0.98)	-0.51 _c (0.83)
批判的自己認識 ⁴	42.30 _a (26.64)	60.00 _{bc} (29.57)	66.45 _b (29.36)	56.77 _c (26.60)	37.61 _a (27.34)	30.40 _d (28.76)
自己認識手段の認知						
自己観察 ⁴	43.21 _a (19.08)	41.23 _a (24.22)	54.82 _b (23.89)	55.48 _b (23.84)	44.28 _a (26.19)	43.81 _a (25.77)
肯定的側面 ⁴	37.31	36.38	39.98	40.43	34.74	35.19
否定的側面 ⁴	52.73**	49.59*	59.49**	59.70***	64.05***	58.20***
社会的フィードバック ⁴	29.33 _a (20.25)	32.86 _a (23.44)	20.23 _b (18.71)	20.17 _b (19.29)	29.19 _a (24.02)	27.83 _a (23.06)
肯定的側面 ⁴	30.37	34.86	31.12**	31.97**	39.18***	35.33***
否定的側面 ⁴	22.35	24.59	16.03	11.54	13.04	11.02
社会的比較 ⁴	27.46 (18.39)	25.91 (17.90)	24.96 (20.30)	23.56 (19.99)	27.35 (21.16)	28.36 (21.24)
肯定的側面 ⁴	33.32	28.76	28.27	28.14	29.67	30.37
否定的側面 ⁴	24.92	24.81	22.15	20.82	22.72	27.99

数値: ¹評定値 (1~7) ²評定値 (1~4) ³因子得点 ⁴%
() 内は標準偏差。

共通の英文字を持たない平均値間には有意な差がある ($p<0.05$, Tukey 法)。

*** $p<0.001$ ** $p<0.01$ * $p<0.05$ で他側面より選択率が高い。

協調性が相互独立性を凌ぐが、中年成人では相互独立性が相互協調性より高い。但し、両者間に有意差があるのは、高校生 ($t(110)=4.29$ $p<0.0001$), 大学生 ($t(146)=5.14$ $p<0.0001$), 若年成人 ($t(156)=2.97$ $p<0.01$) である。また、相互独立性は小学生から高校生にかけて低下し若年成人まで低い水準に止まり中年成人で上昇に転じ、中年成人と中学生~若年成人との間に多重比較で有意差がある ($p<0.05$, 以下同様)。相互協調性では、高校生と大学生

⁷ 以後の分析でも性別を含め検討したが、以下の有意な性の効果が認められた。(1)男性は女性より相互独立性が高く相互協調性は低い、性差が有意なのは相互独立性では若年・中年成人、相互協調性では中年成人のみである。(2)女性は男性より社会的比較の頻度が高いが、性差が有意なのは高校・大学生のみである。また、自己志向比較は男性に、他者志向比較は女性に多い。(3)「容姿・服装」「同性の他者」「友人」「周囲の他者」「自己不確実感」「評価懸念」は女性に多く、「運動能力」「自己定位」「優越感」「関係への配慮」は男性に多い。(4)女性は男性より自己批判的であるが、性差が有意なのは小学生のみである。(5)女性は男性より自己観察の選択率が高いが、性差が有意なのは小学・大学生のみである。男性は女性より社会的比較の選択率が高いが、高校生・大学生・中年成人においてのみ性差が有意である。なお、いずれの分析においてもタイプII平方和を用いた。

間以外の全ての隣りあう年齢間に有意差があり、小学生から中学生へ低下した後、中学生から大学生へは上昇し、成人期に再び低下している。この傾向は高田 (1999b) の知見を概ね再現し予測1と一致する。

批判的自己認識

年齢毎の各形容詞の選択率を TABLE 2 に示す。選択率に有意差のある形容詞は、多重比較の結果、総じて年齢と共に選択が減る (反抗的な等), 増える (親切的な等), 青年期に選択が多い (あきっぽい等), 少ない (活動的な等) 等に分かれる。また、否定的形容詞の選択率, 即ち批判的自己認識の年齢別の平均を TABLE 1 に示す。年齢×性別の分散分析で年齢の主効果が有意で ($F(5,828)=33.59$ $p<0.001$), 多重比較によれば中学・高校・大学生は小学生・若年成人・中年成人より選択率が高く相対的に自己批判的である。これは高田 (2001) の知

TABLE 2 自己記述形容詞の選択率

	小学生	中学生	高校生	大学生	若年成人	中年成人	$\chi^2(df=5)$
肯定的形容詞							
あたたかい	7.9 _{ab}	4.5 _b	5.4 _{ab}	13.6 _{ab}	17.2 _{ac}	26.5 _c	44.40***
頭がよい	5.6	3.6	0.9	2.7	1.3	3.7	6.68
活動的な	30.2 _a	24.5 _{ac}	11.7 _{bc}	17.7 _a	24.8 _a	21.7 _a	14.53*
きれいな好き	15.1 _a	16.4 _a	16.2 _a	17.0 _a	24.2 _b	25.9 _b	11.55*
個性的な	24.6	24.5	13.5	23.1	21.0	21.2	5.80
親切的な	12.7 _{ab}	8.2 _{ab}	14.4 _b	15.4 _b	29.3 _c	31.2 _c	61.26***
多才な	4.0 _{ac}	1.8 _{ac}	0.0 _a	8.2 _{bc}	3.2 _{ac}	3.2 _{ac}	14.31*
特技がある	43.7 _a	16.4 _b	14.4 _b	6.1 _b	6.4 _b	11.6 _b	98.54***
真面目な	7.1 _{ac}	9.1 _{ac}	10.8 _{ac}	34.0 _a	53.5 _b	61.4 _b	188.63***
明朗な	26.2 _a	18.2 _a	6.3 _b	15.0 _{ab}	28.7 _a	26.5 _a	29.12***
やさしい	16.7 _a	16.4 _a	28.8 _{ab}	25.9 _{ab}	34.4 _b	42.3 _b	37.13***
ユーモアがある	32.5 _a	21.8 _{ac}	21.6 _{ac}	15.6 _{bc}	21.7 _{ac}	28.0 _a	13.54*
夢が大きい	40.5 _a	22.7 _b	26.1 _b	17.7 _{bc}	11.5 _c	9.5 _c	56.98***
容姿がよい	0.8	0.0	0.0	0.7	1.9	1.1	4.22
礼儀正しい	14.3 _a	8.2 _a	10.8 _a	11.6 _a	28.7 _b	29.6 _b	44.20***
否定的形容詞							
あきっぽい	26.2 _a	47.3 _b	52.3 _b	42.9 _b	19.7 _a	12.7 _a	86.86***
意志が弱い	5.6 _a	18.2 _b	22.5 _b	27.2 _b	19.7 _b	17.5 _b	22.83***
おこりっぽい	24.6 _a	31.8 _a	39.6 _a	15.6 _b	36.9 _a	18.5 _b	35.12***
落ち着かない	28.0 _{ab}	40.0 _a	26.1 _{ab}	16.3 _b	5.1 _c	3.7 _c	96.26***
気が小さい	8.7 _{ab}	14.5 _{bc}	17.1 _{bc}	25.2 _c	15.9 _{bc}	27.5 _c	23.76***
消極的な	10.3 _a	20.0 _{bc}	21.6 _{bc}	23.8 _c	10.2 _a	13.8 _{ab}	18.07**
ずるがしこい	14.3 _a	8.2 _{ab}	8.1 _{ab}	10.9 _{ab}	5.7 _{bc}	3.7 _c	14.11*
流されやすい	16.7 _a	22.7 _{ab}	32.4 _{bc}	40.1 _c	29.9 _{bc}	15.3 _b	36.53***
生意気な	11.1	6.4	8.1	4.1	5.1	4.8	7.91
反抗的な	19.8 _a	30.0 _a	12.6 _{ac}	8.8 _{acd}	3.2 _a	1.1 _d	80.80***
ひねくれた	6.3 _a	11.8 _{ab}	12.6 _{ab}	18.4 _b	5.7 _a	5.8 _a	21.80***
不注意な	17.5 _{ab}	18.2 _{ab}	11.7 _{bc}	17.0 _{ab}	10.8 _c	6.3 _c	15.15**
無責任な	0.0 _a	10.0 _b	14.4 _b	9.5 _{bc}	2.5 _a	3.2 _{ac}	33.94***
弱々しい	1.6	1.8	0.9	2.0	2.5	0.5	2.91
わがままな	16.7 _a	14.5 _b	31.5 _b	20.4 _{ab}	10.8 _c	15.3 _b	22.05***

数値は各形容詞を選択した者の割合。*** $p<0.001$, ** $p<0.01$, * $p<0.05$ 有意。

共通の英文字を持たない比率間には有意な差がある ($p<0.05$, Tukey 法)。

見を再現し予測 2 と一致する⁸。

自己認識手段の認知

各手段が選択された率の平均を TABLE 1 に示す。各手段の選択率と偶然値(33.3%)との差の検定では、全群で自己観察の選択率が有意に高い(年齢順に $t(125)=5.83$, $t(109)=3.43$, $t(110)=9.25$, $t(146)=9.76$, $t(156)=6.21$, $t(188)=5.61$ 全て $p<.001$)。社会的比較は各段階で低い(年齢順に $t=3.56, 4.33, 4.33, 3.41, 6.12, 3.20$ 全て $p<.001$)。社会的フィードバックは高校生以上では低いが(年齢順に $t=7.36, 8.25, 2.20, 3.25$ 全て $p<.05$)、小・中学生では有意差はない。また年齢×性別の分散分析では、自己観察で年齢の主効果がある($F(5,828)=6.49$ $p<.0001$)。中学生と高校生、大学生と若年成人の間に多重比較で有意差があり、小・中学生は同水準であるが高校・大学生にかけて選択率は増大し、以後若年・中年成人で減少する。社会的フィードバックでは($F=7.57$ $p<.0001$)、中学生と高校生、高校生と若年成人、大学生と若年成人の間に有意差があり、小・中学生は同水準であるが高校・大学生では減少し、若年・中年成人で再び増大する。社会的比較でも青年期に選択率が減少する傾向があるが有意ではない($F=1.28$)。社会的比較で有意差がない点を除き、これらは高田(2001)の知見を追認し、予測 4 とほぼ一致している。

自己認識の基本傾性とメタ自己認識

選択された形容詞を肯定的と否定的なものに分け、各々の中での各手段の選択率の平均値を TABLE 1 に示す⁹。年齢×性別×側面(対象者内要因)の分散分析を各手段毎に行った結果、自己観察($F(1,623)=80.44$)と社会的フィードバック($F(1,623)=78.50$)で有意な側面の主効果が見られ($p<.001$)、社会的フィードバックは自己の否定的側面より肯定的側面で選択率が高いのに対し、自己観察では逆である。社会的比較でも社会的フィードバックと同様の傾向であるが、側面の主効果は有意でない($F(1,623)=1.74$)。また、社会的フィードバックでは側面×年齢の交互作用が有意で($F(5,623)=8.71$ $p<.001$)、小・中学生では側面間の選択率に差がない。社会的比較での差が有意でない以外、この結果は高田(2001)の知見と予測 5 に一致している。

社会的比較の頻度と様態

4 段階評定を 4～1 と得点化した平均を TABLE 1

⁸ これらの形容詞には人格特性の次元の相違(例えば、林(1978))が含まれるが、次元による選択率の相違は基本的に認められない。

⁹ この分析は、選択した形容詞が全て肯定的または否定的であった対象者を除外して行った。また、形容詞を選択した個数(1～5)による各手段の選択率への影響は全年齢群で認められない。

に示す。年齢×性別の分散分析で年齢の主効果が有意で($F(5,828)=21.93$ $p<.001$)、中学生と高校生、大学生と若年成人、若年成人と中年成人間には多重比較で有意差がある。高校・大学生で頻度が高く、高田(1999a)の知見と予測 3 に一致する。

比較の対象、相手、理由の各項目が選択された割合を TABLE 3 に示す。各項目毎の年齢×性別×選択の有無の対数線形分析で以下の傾向が認められた。対象「態度・意見」「行動」、相手「周囲の他者」「平均・常識」、理由「自己向上」は、年齢が高い群で選択率が相対的に高い。逆に、対象「才能・能力」「性格」、相手「友人」「架空の人物」「理想とする人」、理由「関係への配慮」は低い。一方、対象「容姿・服装」「生き方」、相手「同年齢の他者」「同性の他者」、理由「自己不確実感」「状況不確実感」「優越感」「劣等感」「評価懸念」は、総じて他の時期より青年期に選択が多い。これらの傾向は、高校生の選択率がどの項目でもやや低い他は、高田(1999a)の知見と概ね一致している。

社会的比較の類型

小・中学校群の比較相手「両親」「先生」を「非類似他者」とし、全年齢群に共通する項目を対象に、選択を 1、非選択を 0 とし比較対象・相手・理由毎に因子分析(主成分分解、オブリンミン回転)を行った。従来の社会的比較研究の論点に基づき、対象と相手では 2 因子(累積寄与率 41.6%、45.3%)、理由では 3 因子(累積寄与率 44.0%)を解釈した(TABLE 4)。対象の因子 1 (自分の態度、性格、行為を含む「自己特性」)、相手の因子 1 (自分と類似した属性を持つ「類似他者」)、理由の因子 3 (他者と比べた自己評価を意味する「自己評価」)は、社会的比較過程理論(Festinger, 1954)の古典的解釈に概ね対応する。理由の因子 1 (他者を気にする傾向が強い「他者配慮」)は社会的比較の自己融合機能、因子 2 (他者との位置関係に関心が向く「地位不安」)は自己高揚機能や自己向上機能と呼ばれている内容(高田, 1992)に近い。一方、対象の因子 2 (他者の目に明らかな容姿や能力である「外的属性」)と相手の因子 2 (身近でなく自分と異なる他者である「対比他者」)は、理論が直接触れていないものである。

次に、上記計 7 因子の因子得点を対象に 2 次因子分析を行い、TABLE 4 に示す 2 因子を解釈した(累積寄与率 48.3%)。因子 1 は「外的属性」「他者配慮」「類似他者」「地位不安」から成り、自分と類似した他者との相対的地位への不安を基に、他者を意識し外的属性を比較する様態である。因子 2 は「自己特性」「自己評価」「対比他者」から構成され、自分自身の特性や方向の明確化の為に、自分とは異なった他者と対比する様態であ

TABLE 3 社会的比較の対象・相手・理由の選択率

項 目			小学生	中学生	高校生	大学生	若年成人	中年成人
対象	態度・意見	(ものごとの考え方)	38.9**	40.9**	39.0**	62.7**	64.3**	73.5**
	行動	(態度やふるまい)	30.2*	26.4*	38.0	40.0	43.3	46.0**
	才能・能力	[学力や成績]	56.3*	63.6**	52.0	46.7	36.9*	31.7**
	性格		47.6**	40.9	41.0	40.0	23.6**	27.0**
	生き方	[生活のしかた]	25.4	20.9*	24.0	40.7**	31.8	36.0
	容姿・服装	(容姿や服装)	26.2*	30.0	52.0**	58.0**	27.4**	24.3**
	生活状況		—	—	19.0	22.0	30.6	28.6
	運動能力		64.9	44.5	—	—	—	—
	将来の希望		18.3	17.3	—	—	—	—
	同年齢の他者		62.7	66.4	61.0	76.7**	59.9	55.0**
相手	同性の他者		34.1	40.9	35.0	55.3**	42.0	35.4
	友人		80.2**	75.5**	62.0	63.3	37.6**	31.2**
	架空の人物	(小説や映画の主人公)	19.8**	12.7**	9.0	7.3	1.9**	3.2**
	理想とする人		34.1**	28.2*	28.0	20.0	12.1**	11.1**
	周囲の他者	(身近な人)	—	—	34.0**	38.7	51.6**	44.4
	平均・常識	(平均や常識)	—	—	13.0*	22.0	31.2*	34.9*
	非類似他者	(自分とはかなり異なった人)	—	—	7.0	10.7	9.6	10.6
		[両親]	6.3	5.5	—	—	—	—
		[兄弟・姉妹]	28.6**	13.6**	—	—	—	—
		[先生]	2.4	1.8	—	—	—	—
理由	自己定位	(自分自身の位置や立場を知りたい)	53.2**	43.6	20.0**	40.7	40.8	41.8
	自己向上	(自分自身を向上させたい)	34.1*	41.8	36.0**	43.3	49.0*	49.2*
	状況不確実感	(自分のすべきことや進む方向が分からない)	15.1	19.1*	16.0	18.7*	8.9	6.9**
	自己不確実感	(自分に自信がなく不安だ)	34.9	41.8	55.0**	56.0**	27.4**	18.5**
	優越感	(他人に対して優越感をもちたい)	10.3	11.8	9.0	17.3**	8.3	7.9
	劣等感	(他人に対する劣等感がある)	19.0	18.2	10.0	24.0**	10.2	8.5**
	関係への配慮	(自分を他人にあわせたい)	14.3**	10.9	7.0	8.0	5.1	6.3
	評価懸念	(自分が他人にどう思われているか気になる)	42.9	36.4	57.0**	54.0**	32.5**	26.5**
	他者への関心	(他の人の状態に関心がある)	33.2*	25.5	17.0**	36.1**	22.9	27.5

() 内は質問紙中の記述。[] 内は同じく小・中学生用の場合。

数値は、各選択肢を選んだ対象者の割合。対数線形分析で、年齢段階×選択の有無の交互作用が*** $p<.01$ * $p<.05$ で各段階での選択率が相対的に高いあるいは低いことを示す。—は、その年齢段階には含まれない選択肢。

る。この2つの様態を対比的に捉えると、前者は他者志向比較、後者は自己志向比較と言える¹⁰。

自己志向比較と他者志向比較

2次因子分析での因子得点を、他者志向比較得点と自己志向比較得点とした。その年齢群毎の平均値をTABLE 1に示す。年齢×性別の分散分析で年齢の主効

¹⁰ この2類型は高田(1999a)の内的・自己志向的比較と外的・他者志向的比較にほぼ対応する。双方の資料で、Festinger(1954)が同列とする態度・意見と能力が異なる因子に分離したことは着目に値する。比較対象で「性格」は双方の因子に負荷が高いが、性格が能力と類似した特徴を持つことを考慮すると(高田, 1992), 日本文化では能力や性格が外的属性として捉えられる可能性について、今後の検討が示唆される。同様に、複数因子への負荷量が高い「関係への配慮」「劣等感」「自己向上」も、社会的比較の機能との関連で更に吟味する必要がある。また、各年齢群毎に因子分析を行った場合、小学生では「自己特性」が因子1, 「外的属性」が因子2に含まれ、自己志向比較と他者志向比較の区分はやや不明確である。更に、小・中学生と高校生以上の2群に分け、対象と相手に関する全項目について因子分析を行った結果、前者では「将来の希望」は「自己特性」, 「運動能力」は「外的属性」の因子に含まれた。後者では「生活状況」は「外的属性」に, 「身近な他者」は「類似他者」に, 「平均・常識」は「対比的他者」に含まれた。これらの項目も含めた2次因子分析を小・中学生群と高校生以上群別に行った結果、両群共TABLE 4と概ね同様な2因子解を解釈し得た。

TABLE 4 社会的比較の様態の因子パターン

		因子1	因子2	因子3	h ²
対象	態度・意見	.640	-.320		.512
	生き方	.562	.128		.476
	行動	.536	.008		.296
	性格	.471	.465		.438
	才能・能力	-.106	.691		.489
	容姿・服装	.117	.588		.359
相手	同性の他者	.737	-.004		.542
	同年齢の他者	.732	-.086		.543
	友人	.523	.209		.317
	架空の人物	.109	.713		.520
	理想とする人	.095	.650		.432
	非類似他者	-.096	.461		.222
理由	自己不確実感	.720	.043	-.340	.636
	評価懸念	.610	-.033	.108	.385
	状況不確実感	.536	.147	.047	.311
	関係への配慮	.443	-.210	.366	.366
	優越感	.023	.683	.043	.469
	劣等感	.473	.482	-.112	.470
	自己向上	-.132	-.393	.277	.249
	他者への関心	-.014	-.040	.660	.548
	自己定位	-.044	-.211	.467	.437
	全体				
全体	対象：外的属性	.787	.032		.619
	理由：他者配慮	.680	.179		.494
	相手：類似他者	.590	.205		.390
	理由：地位不安	.396	-.187		.192
	理由：自己評価	.059	.782		.614
	対象：自己特性	-.048	.711		.507
全体	相手：対比他者	.264	.487		.307

因子間相関：.061(対象), .130(相手), -.013(理由1対2), -.119(理由1対3), .079(理由2対3), .292(全体)

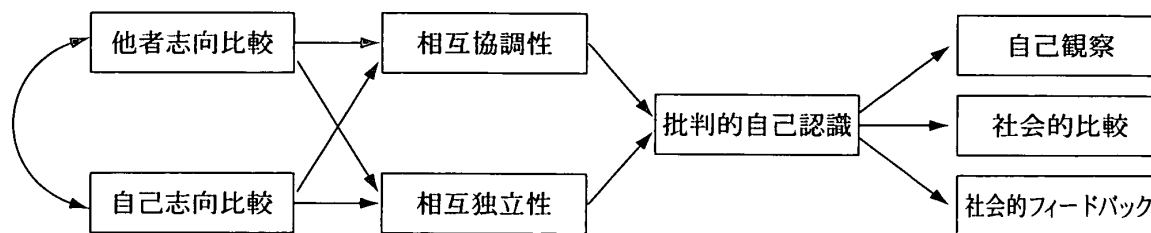


FIGURE 1 4指標の因果モデル（誤差項は省略）

果が両者で有意である。自己志向比較では ($F(5,828)=7.93$ $p<.001$), 多重比較で高校生のみ他より頻度が少ない。他者志向比較では ($F(5,828)=27.94$ $p<.001$), 小学生と高校生, 大学生と若年成人との間に有意差があり, 大学生を中心に青年期の比較頻度が高い。これは高田 (1999a) の知見を概ね追認し, 予測 3 と一致する。

各指標間の関連と年齢による相違

(1)自己志向／他者志向比較得点, (2)相互独立／協調性, (3)否定的形容詞の選択率, (4)メタ自己認識としての各自己認識手段の選択率, の4種の指標について, FIGURE 1 に示す仮説モデルに基づき共分散構造分析によるパス解析を各年齢群毎に行った¹¹。但し, 自己認識手段は3つの選択肢から1つを選ぶ形式であり, 各選択率の同時投入は多重線形性の問題を生むため, 社会的手段として社会的フィードバックと社会的比較のいずれかをを用いた2種の分析を別個に実施した。両者共 GFI は概ね0.9以上であり (年齢順に前者では .90, .91, .93, .94, .91, .89, 後者では .96, .96, .92, .92, .95, .90), モデルは一定の適合度を持つ。TABLE 5 は年齢毎の標準化パス係数で, 他者志向比較と相互独立／協調性, 相互独立／協調性と批判的自己認識の関係では, 小・中学生と高校生以降で明確な相違がある。この4つのパスについて, 中学生と高校生の係数を同一とするモデルと本モデルとの適合度の差を検討したところ, いずれにおいても本モデルで有意に適合が改善されたのに対し ($\chi^2(1)=12.5\sim22.3$ $p<.001$), 小学生と中学生, 及び, 高校生～中年成人の各群間では適合の改善は見られない

¹¹ (1)～(3)の指標について, 本モデル以外の因果関係も想定し得る。例えば, 否定的自己認識が社会的比較をもたらす, それが相互協調性を導く, 等である。しかし, 3指標の組み合わせ計6種のモデルの年齢群毎のパス解析によれば, 相互独立／協調性→社会的比較→自己認識 (中年成人: $GFI=0.91$), 自己認識→相互独立／協調性→社会的比較 (小学生: $GFI=0.96$, 中学生: $GFI=0.94$) のモデルを除き, 本モデルのみで0.90以上の GFI が得られた (年齢順に0.99, 0.98, 0.99, 0.95, 0.94, 0.97)。AIC が最小であるのも各年齢を通じ本モデルであった。従って, 想起された自己認識手段はメタ自己認識に係わり他3変数の原因とは考え難いことを併せて考慮すれば, FIGURE 1 のモデル指定を否定する理由はない。

TABLE 5 年齢段階毎の標準化パス係数

	小学生	中学生	高校生	大学生	若年成人	中年成人
他者志向比較→相互協調性	-.11	-.07	.38***	.42***	.46***	.48***
自己志向比較→相互協調性	.23**	.16*	.00	-.03	-.05	.08
他者志向比較→相互独立性	.30***	.39***	-.24*	-.30***	-.36***	-.28***
自己志向比較→相互独立性	.05	-.11	.08	.09	-.08	.19***
相互協調性→批判的自己認識	-.28**	-.48***	.01	.12	.09	.06
相互独立性→批判的自己認識	.09	.11	-.35***	-.40***	-.37***	-.29***
批判的自己認識→自己観察	.11	.18*	.23**	.22**	.40***	.24**
批判的自己認識→社会的比較	.19*	-.08	-.05	-.07	-.02	-.01
批判的自己認識→社会的フィードバック	-.28*	-.12	-.16*	-.19*	-.45***	-.26***
	(-.01)	(.01)	(.07)	(.07)	(.10)	(-.04)

社会的比較へと社会的フィードバックへのパス係数は, 別個に実施した結果。

()内は自己志向比較と他者志向比較の相関係数。

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

($\chi^2(1)=0.1\sim3.8$)。

従って, 有意なパス係数に着目すれば中学生までと高校生以降との差異は明らかで, 後者では, 他者志向比較から相互協調性へは正で相互独立性へは負, 相互独立性から批判的自己認識へは負, 批判的自己認識から自己観察へは正で社会的フィードバックへは負, という結果が一致して見られる。各指標の平均値を考慮すると, 高校・大学生では, 他者志向比較の多さが相互協調性の高さと相互独立性の低さを導き, そこから生じた批判的自己認識が自己観察を多く, 社会的手段を少なく想起させる, と言える。他方, 若年・中年成人では, 他者志向比較の少なさが高い相互独立性を生み, それが批判的自己認識の低さを導く結果, 自己観察は少なく社会的手段は多く想起されるという, 青年期とは異なる様相が示されている。他方, 小・中学生では, 他者志向比較が相互独立性をもたらすが, それは批判的自己認識とは関連せず, 相互協調性の高さは肯定的自己認識を導く, という青年期以降とは逆の連関が示されている。批判的自己認識と認識手段の認知との連関も一部は有意でない。

考 察

相互協調的自己観の内面化と青年期

本研究では以下の知見が再認された。(1)青年中・後

期では、相互独立性が低く相互協調性は高い(予測1)、批判的に自己を認識する(予測2)、自己の否定的側面は自己観察、肯定的側面は社会的手段を通じて認識したと想起される(予測5)、という日本的自己の特質を示す諸傾向が顕著である、(2)その時期には、社会的比較、殊に他者志向比較の頻度が高い(予測3)、自己認識手段の想起は自己観察が多く社会的手段は少ない(予測4)、の2点である¹²。今回の知見では、若年成人の相互独立/協調性が大学生に近い、自己認識手段としての社会的比較の選択率の差が有意でない、高校生の社会的比較の頻度が若干低い、等の従来と異なる点も散見されるが、上記2点が基本的に確認されたことは、これらが堅牢な知見であることを示唆する。

最近、Matsumoto (1999) は、文化的自己観に関する従来の知見は独立変数(日米)と従属変数との関係を示すだけで、Markus & Kitayama (1991) が主張する相互独立/協調性の介在を確認する証拠は無く、文化的自己観は日米間の文化差を説明する概念とは認め難いと断じている¹³。確かに、文化と相互独立/協調性の関連や、相互独立/協調性と諸社会的行動の関係を検討した例は従来少ない。その点、日本文化のみの資料とは言え、文化的自己観の内面化と諸変数との関連を発達的に確認した本研究の知見は、Matsumoto (1999) 等の懐疑論への反証の1つとなろう。

他方、日常の社会的比較を通じて文化的自己観が個人に内面化され、それが自己認識の基本傾性とメタ自己認識を規定する、という過程が青年中・後期に明確になることが示唆された。ところが、この過程は同一でも、青年中・後期と成人期では社会的比較、相互独立/協調性、自己認識の基本傾性の平均値は対照的であった。即ち、日本的自己の特質を示す指標は青年中・後期で極大であるのに対し、測定尺度に現れた成人期の諸指標は日本的自己の様態とは一見矛盾している。

1 次的反映過程と2 次的反映過程

この知見によれば、日本文化での自己の認識機制は青年中・後期に確立し、その特質が最も顕著に現れる

¹² 対象者が比較的多数であることを考慮し、年齢の主効果が有意であった変数について、その大きさの指標 f (Cohen, 1977) を検討したところ、.15～.44に分布した。Cohen は $f = .10$ (小)～.25 (中)～.40 (大) という基準を示しているが、.25を越えたのは比較頻度、他者志向比較、批判的自己認識であった。

¹³ Matsumoto (1999) が総覧した研究は全て Singelis (1994) の尺度を用いている。当該尺度は日系と欧州系米国人への実施を通じてのみ妥当性を検討したものであり、日本人と米国人の直接比較は為されていない。また、明らかに日本人には不適切な項目が含まれており、これを日本人に実施した諸研究の結果には疑問の余地がある。

と言える。即ち、青年期に自己が主体的に再構成される際に相互協調的自己観は内面化され、そこに他者志向比較が介在する可能性が示唆される。自己批判傾向は青年期の発達の特性とされるが、それが相互独立性の低さや社会的比較の多さと関連することは、青年期の自己認識の発達に文化的要因が係わっていることを示唆する。これは、ある文化で優勢な社会的表象が個人の認知表象に直接反映される1 次的反映過程(高田, 1999b) が、社会的比較を媒介として青年期に生じていることを意味する。

これに対し成人期では、自己認識過程は同一であるにも拘わらず、比較の少なさが相対的に高い相互独立性をもたらす、それが肯定的自己認識を生むという、青年期とは対照的な傾向が示された。親切的、礼儀正しい等の形容詞の選択増加傾向に示されるように、成人は青年期に内面化された相互協調的自己観を基に、日本文化の規範に沿った行動特性を身につけていることが推察される。これが、社会的地位の上昇による行動の自由度の増大とも相まって、社会的比較の頻度が減少し一見すると相互独立的な自己認識が導かれる、という過程が窺われる¹⁴。

高田(1999b)は、ある文化で優勢ではない社会的表象が優勢な表象に規定されつつ個人に取り込まれる過程を想定し、これを2 次的反映過程としている。長期の社会適応を経た成人が相互協調性の高さと相互独立性の低さを尺度値上では示さないという現象は、この過程を意味すると考えられる。即ち、人間に普遍的な個別性に着目すれば理解することは可能な相互独立的自己観を、青年期に確立した相互協調性を基礎に意味づけ取り入れた結果、老人によく見られる相互独立性と相互協調性の双方が高い、例えば「和を保つことは大切」という意見を「いつも主張する」という行動傾向を生むに至ると示唆されるのである(高田, 1999b)。

中国人やベトナム人も尺度値では高い相互独立性を示す(高田, 2000b)。しかし、日本人成人も含めアジアでの尺度上の高い相互独立性の意味内容は、1 次的反映過程を通じ内面化された西欧人のそれとは似て非なる、2 次的反映過程によるものであろう。実際、アジア諸文化での高い相互独立性は、当該社会で優勢な価値規範や権威主義と関連している(Takata, 1999c)。一見相互独立的な日本人の行為も、日本文化という文化資源が

¹⁴ これは、成人期では相互協調性が比較頻度に影響することを示唆する。中年成人期のみで相互独立/協調性の社会的比較への影響を仮定するモデルの適合度がある程度高い事実(注10)、またFIGURE 1のモデルの適合度が中年成人で最も低いことは、これを窺わせる。

背景にある限りそれに規定される、という北山(1998)の指摘に、これらの知見は合致する。

本研究の限界と今後の問題

他方、小・中学生では、高校生以降で見られた関連は認められず、比較の多さが高い相互独立性を導き、高い相互協調性は肯定的自己認識を生む傾向のみが見られた。また、小学生の相互協調性の水準は高いが、中学生では相互協調性と肯定的自己認識が著しく低下している。これらは、児童期後期から青年期前期にかけての次の発達過程を示唆するとも解釈できよう。即ち、(1)親を始めとする大人の価値の受動的影響によって、児童期の相互協調性と「よい子」としての高い自己評価との関連が生じる、(2)この時期の社会的比較の多さは、大人からの独立としての相互独立性を生む契機となる、(3)大人の認める「よい子」の否定は、青年前期での相互協調性の低さと自己評価の低さを導く。

しかし、現段階ではこれは1つの推論に過ぎない。本研究で用いた質問紙の妥当性・信頼性の確認は主に大学生を対象に行われており、年少対象者ではメタ自己認識の内省可能性、質問への黙従傾向、自己認識形容詞の適切性等、検討を必要とする事柄も考えられなくはない。青年期に至るまでの文化的自己観の内面化過程に関しては、今後なお吟味を必要としよう。

一方、青年中期以降で適合した因果モデルにも検討の余地はある。このモデルは、日常生活での社会的比較が自己認識に及ぼす影響過程を主な焦点としたものであるが、成人期の結果に関して触れたように、文化的自己観によって比較頻度が規定されている可能性はある。日常の比較の実態に関する比較文化資料が皆無である現在¹⁵、この位置づけの適否を実証的に論ずることは出来ないが、これは資料に基づき改めて検討されるべき問題であろう。また、青年前期と中期以降の間でのパス係数の正負逆転は明確ではあるが、モデルの説明率は0.05～0.25と低い水準に止まる。従って、対象者と各指標の再吟味と改善を通じて、このモデルの妥当性は更に確認されるべきであろう。

本研究は更に幾つかの問題も残しており、例えば Schoeneman (1981) による自己認識手段の測定は、実態より自己像に対する意味づけを反映していると考えた。実際、この指標は社会的比較の頻度や相互独立／協調性とは何の関連も示さず、批判的自己認識の程度とのみ相関しており、また、こう説明することによって、日常事態での社会的比較(高田, 1999a)と、自己認

識手段としての社会的比較(高田, 2001)に関する従来の知見の矛盾を理解し得たのである。しかし、他の測度も同じく回想によっており、自己認識手段のみ実態と離れていると解釈することには問題が残る。特に、社会的比較の回想的質問紙調査は必ずしも実態を反映しない可能性が指摘されている(Wood, 1996)。本研究では、想起される内容の具体性の程度に基づいた解釈によったが、質問紙以外の多様な測定法を用いた検討も今後は必要であろう。

また、本研究は横断資料により成人資料は無作為抽出ではなく一部は郵送調査を用いた。成人の相互独立／協調性は無作為資料か否かに影響され得る等(高田, 2000a)、今回の資料がコホートや社会的地位、あるいは自己評価の高低等の要因に影響されている可能性もある。また、1次的反映過程と2次的反映過程の妥当性を確認するには、西欧文化での発達の資料との対比作業を必要とするが、それを欠く本研究の比較文化的側面での意義は制約される。更に、相互独立／協調性の尺度値は、同一程度でも意味内容が異なることが示唆された。尺度以外の方法で文化的自己観を捉えることも必須である。これら諸問題の検討を含め、理論的検討と知見を更に積み重ねることが不可欠である。

しかしながら、上記の諸制約を考慮した上で本研究の結果を見ると、以下の発達過程が示唆される。即ち、児童期後期までは周囲の成人の価値規範に影響される部分が大きい。青年中・後期での主体的な自己再構成に際し、社会的比較を通じた1次的反映過程により日本の自己の特質が改めて形成され、更にそれを基礎とした成人期の2次的反映過程の結果、日本的自己の特質とは一見矛盾した現象が示される、という変化である。これは集積された知見に基づく1つの推論であるが、このモデルを基礎に日本文化における自己認識の発達過程を更に探求することは可能であろう。

引用文献

- Ausbel, D.P., Montemayor, R., & Svojiar, P.N. 1977 *Theory and problems of adolescent development. 2nd ed.* New York : Grune and Stratton.
- 東 洋 1994 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- Baumeister, R.F. 1998 The self. In D.T. Gilbert, S.T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology, Vol. 1 (4th ed.)*. Boston : McGraw-Hill. Pp.680—740.

¹⁵ 社会的比較が米国人より日本人に多いことを示した高田(1993)の知見は、基本的にはメタ自己認識を扱っている。

- Bern, D. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 6. New York : Academic Press. Pp.1—62.
- Cohen, J. 1977 *Statistical power analysis for the behavioral sciences*. Rev.ed. New York : Academic Press.
- Cooley, C. 1902 *Human nature and the social order*. New York : Charles Scribner's Sons.
- 土居健郎 1969 「甘え」の構造 弘文堂
- Diener, E., & Diener, M. 1995 Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653—663.
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214—217.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117—140.
- 浜口恵俊 1982 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 233—247.
- Heine, J.S., Takata, T., & Lehman, R.D. 2000 Beyond self-presentation : Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 71—77.
- Hogg, M.H. 2000 Social identity and social comparison. In J. Suls, & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison*. New York : Kluwer Academic/Prenum. Pp.401—421.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- Kashima, E., & Hardie, E.A. 2000 The development and validation of the relational, individual, and collective self-aspects (RIC) scale. *Asian Journal of Social Psychology*, 3, 19—48.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No.14.
- 唐沢真弓 1997 日本的道德律の実証的研究 財団法人倫理財団第9回研究助成報告論文集, 17—33.
- 北山 忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- Markus, H., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224—253.
- Matsumoto, D. 1999 Culture and self : An empirical assessment of Markus and Kitayama's theory of independent and interdependent self-construal. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 289—310.
- 南 博 1983 日本の自我 岩波書店
- 三好智子 2001 “個” — “集団” 間葛藤の観点から見た青年後期の自我同一性の形成過程 心理学研究, 72, 298—306.
- Schoeneman, T. 1981 Reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 49, 284—294.
- Singelis, T.M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580—591.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 — 日本人大学生にみられる特徴 — 教育心理学研究, 41, 339—348.
- 高田利武 1995 自己認識方途としての社会的比較の位置 — 日本人大学生に見られる特徴 — 奈良大学紀要, 23, 259—270.
- 高田利武 1999a 日常事態における社会的比較と文化的自己観 — 横断資料による発達の検討 — 実験社会心理学研究, 39, 1—15.
- 高田利武 1999b 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 — 比較文化的・横断的資料による実証的検討 — 教育心理学研究, 47, 480—489.
- Takata, T. 1999c What is independency in Asian culture ? Findings from Chinese, Vietnamese, and Japanese cultures. *Abstracts of Third Conference of the Asian Association of Social Psychology*, 79—80.
- 高田利武 2000a 相互独立的一相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, 8, 145—163.
- 高田利武 2000b 文化的自己観と企業改革・従業員意識 松戸武彦・高田利武(編) 変貌するアジアの社会心理 ナカニシヤ出版 Pp.123—151.
- 高田利武 2001 自己認識手段と文化的自己観 — 横断的資料による発達の検討 — 心理学研究, 72, 378

- 386.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造—下位
 様態と世代差— 心理学研究, 66, 173—178.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立の
 —相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大
 学紀要, 24, 157—173.
- 谷 冬彦 1997 青年期における自我同一性と対人恐
 怖的心性 教育心理学研究, 45, 254—262.
- 塘利枝子 1995 日英の教科書に見る家族：子どもの
 社会化過程としての教科書 発達心理学研究, 6, 1
 —16.

- 恒吉僚子 1992 人間形成の日米比較 中央公論社
- Wood, J.V. 1996 What is social comparison and
 how should we study it? *Personality and
 Social Psychology Bulletin*, 22, 520—537.

付 記

本研究実施は平成12年度科学研究費補助金(基盤研究
 C12610152)の助成による。資料収集に御助力賜った各位
 と、資料解析の助言を戴いた関西大学・与謝野有紀氏
 に深甚の謝意を表する。

(2001.5.28 受稿, '02.9.21 受理)

Internalization of the Japanese Cultural View of Self Through Social Comparison : A Developmental Analysis Based on Cross-Sectional Data

TOSHITAKE TAKATA (FACULTY OF SOCIOLOGY, NARA UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2002, 50, 465—475

The present study was conducted to shed light on the developmental process in the internalization of cultural self-construal by Japanese. 840 respondents, divided into 6 age categories from elementary school sixth graders (average age 11.7 years) to adults on their forties and fifties (average age 46.4 years), answered a questionnaire that measured (1) frequency and different aspects of everyday social comparison, (2) the degree of internalization of the independent and interdependent construal of self, (3) self image, and (4) perceived sources of self-knowledge. Path analysis revealed that (1) a low level of independent self view, internalized through other-directed social comparison, leads, after middle adolescence, to self-critical images which have self-observation as a major perceived source and social feedback as a minor one ; (2) other-directed social comparisons, in contrast, result in an independent self-view and high interdependency, which in turn lead to a positive self-image in late childhood and early adolescence ; and (3) Japanese characteristics of self, consisting of a high level of social comparison, interdependent self-view, negative self-image, and self-observation as a perceived source of self-knowledge, are more evident in adolescence than in adulthood. These findings suggest that the interdependent construal of self is passively acquired in late childhood, whereas it is primarily and actively internalized in adolescence, during which those internalized self-views are then secondarily arranged to form the independent self-view of adults.

Key Words : independent/interdependent self view, social comparison, perceived source of self-knowledge, developmental change, Japanese culture